

# 13 まる ひと じん じゃ ぼう び や 丸人神社の棒火矢 2本

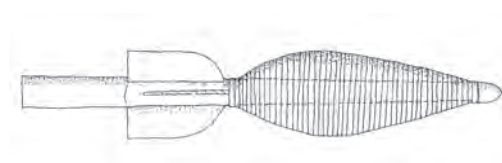


1号矢（下）

2号矢（上）



丸人神社



棒火矢使用時想像図

|     |                                                                   |
|-----|-------------------------------------------------------------------|
| 指 定 | 町指定保護有形文化財 平成 27 年（2015）3 月 26 日                                  |
| 所在地 | 青山文庫（加茂 <sup>ながたけ</sup> 長竹 丸人神社）                                  |
| 年 代 | 江戸時代 文政 9 年（1826）                                                 |
| 祭 神 | 未詳                                                                |
| 寸 法 | 1 号矢 本体長さ 600ミ 羽根なし重量 375グラム（帽子付）<br>2 号矢 本体長さ 571ミ 羽根なし重量 373グラム |
| 素 材 | カシ材                                                               |

棒火矢は大筒又は火矢筒からロケット状に発射され、主に火災を起こさせる武器である。

この棒火矢は試撃に使用されたものを川田某が同神社に奉納したもので、県内でも報告例が少なく貴重なものである。深尾家臣では、加納伴五郎が内原や柳瀬川原等で試撃を行っており、これらからも深尾家の銃砲の歴史も垣間見られる。

棒火矢本体に墨書銘がある。

1号矢（1面）久四郎 （2面）一三五文目 （3面）上

2号矢（1面）久四郎（カ）（2面）上 百四十目（3面）（記載なし）

# 14 まつ ざき てん まん ぐう むな ふだ 松崎天満宮棟札



表

裏



松崎天満宮

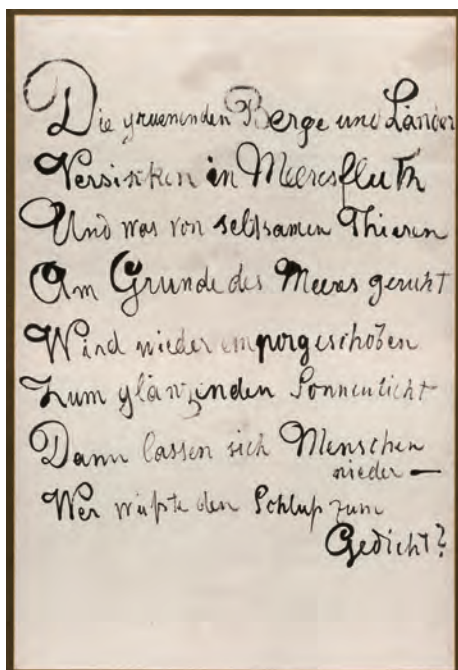
|     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 指 定 | 町指定保護有形文化財 平成 29 年（2017）9 月 6 日    |
| 所在地 | 佐川 松崎 乗台寺（松崎天満宮）                   |
| 年 代 | 南北朝時代 <sup>じょうじ</sup> 貞治 6 年（1367） |
| 寸 法 | 縦 594ミ 横 上部 61ミ 下部 64ミ 厚さ 11ミ      |
| 素 材 | ヒノキ材                               |

松崎の天満宮は乗台寺の鎮守として南北朝時代から鎮座する神社であり、明治時代には村社として地域住民の心の支えであった。

この棟札は、佐川町最古の棟札であり、高吾北地域はもちろん県内においても南北朝時代の貴重な史料である。当時の佐川の有力者たる<sup>これむね</sup>惟宗師信、信光、釜鶴丸、次郎法師丸の人名が確認できるとともに、阿弥陀如来を本尊とする時宗、天台宗、そして現在の不動明王を本尊とする真言宗の寺院として長い歴史を誇る古刹である乗台寺の変遷をもひもとく事ができる。

（現在は非公開）

# 15 ナウマンの詩<sup>うた</sup> 1 枚



H.E. ナウマン

|     |                                 |
|-----|---------------------------------|
| 指 定 | 町指定保護有形文化財 平成 29 年（2017）9 月 6 日 |
| 所在地 | 佐川町総合文化センター                     |
| 年 代 | 明治 18 年（1885）                   |
| 寸 法 | 縦 98 センチ 横 66 センチ               |

ナウマン（Heinrich Edmund Naumann ドイツ人 1854～1927）は明治 8 年（1875）から明治 18 年（1885）在日。東京大学地質学教室初代教授、地質調査所の設立者、フォッサマグナの発見者、中央構造線の提唱者、鳥の巣石灰岩の最初の定義者であり、日本における近代地質学の基礎を築いた人物である。また、その名前の冠せられたナウマンゾウでも有名である。

佐川町には、明治 16 年（1883）、明治 18 年の二度にわたり訪問している。この即興詩は、明治 18 年に案内人の外山矯に与えられたものといわれている。

この詩の日本語訳は、以下の二通りある。

緑なす山々 国原は  
大海の中に安らい  
奇しき動物の  
海底に沈めるもの  
再び輝かしい日の光のもとに  
持ち出され  
人類はここに定住する  
誰か知るこの詩の結論を

【桜井国隆（高知大学名誉教授・ドイツ文学者）訳】

緑の山野は 湖に没して  
奇なる生物遊泳する  
海底となりしが  
後 再び波上に隆起して  
太陽輝く陸地とふ  
然る後 人生じて此處に住めり  
さはれ これより未来は  
神のみ 吾知らん

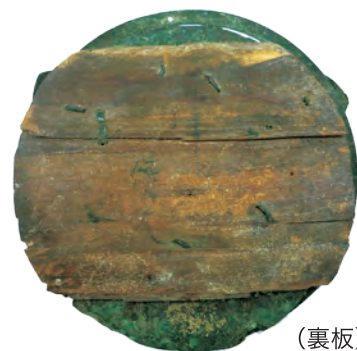
【江原真伍（旧制第三高等学校教授・地質学者）訳】

16

くろ いわ やく し どう かけ ほとけ

## 黒岩薬師堂の懸仏

1面



(裏板)

□ 元年  
□ 僧天

(□は不明文字)

|     |                                        |
|-----|----------------------------------------|
| 指 定 | 町指定保護有形文化財 平成 29 年 (2017) 9 月 6 日      |
| 所在地 | 佐川町総合文化センター (源重 薬師堂)                   |
| 年 代 | 室町時代                                   |
| 寸 法 | 鏡板径 12.63センチ 像高 3.32センチ (蓮華座共 4.38センチ) |

銅製、鍛造、鍍金。ヒノキ材の円板上に薄い金銅板を張って鏡板とし、周縁に銅板製の覆輪を施し、内外区を分ける打ち出しの圏線をめぐらし、内区中央に如来形坐像を据える。像は薄金銅板打ち出しの薄肉像で、蓮華座と共に打ち出し、やや高めの肉髻と側面をふくらませた地髪部を線刻で表し、耳は表さない。両手を胸前に上げて坐すが、尊名は不詳。顔の輪郭、眉、目、口、三道、衣文、手、蓮華座などすべて線刻し、蓮華座中央で鉤で鏡板にとめる。火焰付きの舟形光背を打ち出し、頭上に瓔珞（僅かに残る）を装飾した蓮華形天蓋をとめ、左右に蓮華を挿した大振りの花瓶をとめ、下方に蓮池を波形に打ち出す。外区には大き目の連珠を打ち出し、左右肩上に蓮弁形の鐙座をとめる。鐙座の先端には吊すための小穴を穿つ。裏板は上下が失われているが、上記の墨書銘がある。

この懸仏は源重薬師堂から佐川町総合文化センターへ移管している。

**17** かみ み つ ぎ じ ぞう あ み だ どう きょうぞう **上美都岐地蔵・阿弥陀堂の鏡像** 1 面  
かけ ほとけ **懸仏** 8 面  
そん ぞう **尊像** 2 軀



十一面観音坐像鏡像



地蔵・阿弥陀堂

|            |                                     |
|------------|-------------------------------------|
| <b>指 定</b> | 町指定保護有形文化財 平成 29 年（2017）9 月 6 日     |
| <b>所在地</b> | 佐川町総合文化センター（斗賀野 上美都岐 地蔵・阿弥陀堂）       |
| <b>年 代</b> | 室町時代                                |
| <b>寸 法</b> | 鏡板径 7.85センチ 像高 3.98センチ（蓮華座共 5.0センチ） |

薄手の鑄製銅板に鍍金<sup>と きん</sup>を施し、表面に十一面観音坐像を彫出する。現在は全体に青味を帯びているが、像の部分には鍍金が残る。鏡板の左右肩上の鈕<sup>ちゅう いっちゅう</sup>も一鑄でつくられる。面相と膝の部分がよくわからぬが、頭上<sup>け ぶつ</sup>に化仏を簡略に表し、右手をまげて膝上に置き、左手はまげて胸前に蓮華<sup>すいびよう</sup>を挿した水瓶<sup>すいびよう</sup>をとり、蓮華座上に坐す。

光背<sup>こうはい</sup>は火焰付二重円相の光背である。背面は周縁に幅のせまい帯がめぐらされており、これによって鏡になぞらえたものであろう。

# 17 懸仏



1 十一面観音坐像 懸仏

**寸法** 懸仏 1 鏡板径 12.63センチ 像高 5.15センチ (蓮華座共 6.52センチ)

ヒノキ材の円板上に薄金銅板を張って鏡板とし、周縁に覆輪<sup>ふくりん</sup>を施し、鏡板中央に十一面観音坐像を据える。像は厚肉鑄製の半肉像で、蓮華座と共に一鑄とし、頭頂と蓮華座下に穴をあけて鏡板に針金でとめる（現在は針金が切れてはずれている）。

宝珠状の宝髻<sup>ほうじゅじょう</sup>を結び、天冠<sup>てんかん</sup>台上に化仏<sup>けぶつ</sup>、両頬の角張った顔におだやかな面相を表し、右手をまげて胸前に上げ、左手はまげて膝上に置く。両手先に穴をあけ、左手先の穴には針金が残る。

瓔珞<sup>ようらく</sup>、天衣<sup>てんね</sup>、シベ、蓮華を線刻する。頭上ににぎやかに瓔珞を装飾した蓮華形天蓋<sup>てんがい</sup>をとめ、左右に打ち出しの花瓶<sup>びやうど</sup>を鉤留めする。左右肩には獅噛銀座<sup>しがみかんざ</sup>を鉤留めするが、獅噛銀座には朱が残る。

17 かけ ほとけ  
懸仏



懸仏 2～8

| 寸 法 | 懸仏2 | <small>きょうばん</small> | 鏡板径 | 像高 (台座共) | 3.97センチ |
|-----|-----|----------------------|-----|----------|---------|
|     | 懸仏3 |                      | 鏡板径 | 像高 (台座共) | 5.19センチ |
|     | 懸仏4 |                      | 鏡板径 | 像高 (台座共) | 3.60センチ |
|     | 懸仏5 |                      | 鏡板径 | 像高 (台座共) | 3.83センチ |
|     | 懸仏6 |                      | 鏡板径 |          |         |
|     | 懸仏7 |                      | 鏡板径 |          |         |
|     | 懸仏8 |                      | 鏡板径 |          |         |

## 17 尊像



薬師如来坐像

観音菩薩立像

### 薬師如来坐像

**寸法** 像高 5.70センチ（蓮華座共 6.95センチ）

鏡板を失い薬師如来坐像のみ残る。像は厚肉鑄製の半肉像で、蓮華座と共に一鑄とし、肉髻頂と蓮華座下に柄をつくる。地髪部側面にふくらみをもたせ、まろやかな顔におだやかな面相を表し、衲衣を偏袒右肩につけ、右手を胸前に上げて施無畏、左手はまげて膝上に薬壺をとる。三道、衲衣、シベ、蓮華は線刻で表す。

上半身に比べて膝の表現は薄く扁平である。おおらかな像である。

### 観音菩薩立像

**寸法** 像高 5.46センチ（蓮華座共 6.20センチ）

鏡板を失い観音菩薩立像のみ残る。像は厚肉鑄製の半肉像で蓮華座と共に一鑄とし、背面中央に柄をつくる。天冠台をつけ、面長の顔におだやかな面相を表し、右手は垂下して掌を前にし、左手はまげて体側前方で持物（欠失）をとる。体軀はずん胴で抑揚に欠けるが、衣文の表現は丹念である。蓮華座は薄い。頭部は髪際中央部から上方にかけて破損し、天冠台つ上の原形は不明である。

以上の他に銅造菩薩像の右手が残る。上膊部 5.86 センチ、前膊部 5.69 センチで、銅造菩薩像の右手は臂釧、腕釧をつけ、まげて掌を上にして胸前また腹前に上げた形で、右肩に柄でとめていたものである。

# 18 しら くら じん じゃ はな とりおどり 白倉神社花取踊



白倉神社

|      |                                    |
|------|------------------------------------|
| 指 定  | 町指定保護無形民俗文化財 昭和 59 年（1984）9 月 18 日 |
| 奉納場所 | 斗賀野 <sup>しばのぼう</sup> 芝ノ坊 白倉神社      |
| 年 代  | 江戸時代                               |
| 祭 神  | 冷泉天皇 <sup>れいぜい</sup>               |

花取踊は中世末に、葉山・須崎を中心とする津野領に伝わった踊りで、江戸時代中期に、津野家の家臣だった吾桑<sup>あそう</sup>の堅田氏<sup>かわの うち</sup>が川ノ内に来て同地を開拓し片田氏を名乗り、氏神の白王神社にこの踊りを奉納した。後に白倉神社にも奉納したのが始まりと伝えられており、毎年 11 月 12 日の例祭に奉納される。

踊りの衣裳は、木綿の着物に裁着袴<sup>たつつけばかま</sup>、白櫛<sup>しろたすき</sup>を後へ長く垂らし、手甲脚絆<sup>てっこうきやはん</sup>に白足袋草鞋履<sup>しろ た び ぞうり ば</sup>きの武者姿である。頭にはヤマドリの尾羽と飾りを付けた花笠<sup>かぶ</sup>を被り二列相対して踊る。一列は太刀を持つ組と、一列は柄に紙シデ<sup>え</sup>を着けた薙刀<sup>なぎなた</sup>を持つ組とに分かれて、相互に行き交い踊る。

現在、歌は歌われていないが、演目は、「太刀かまのて」「しのぎ廻し」「くるま」「にしがた」「まつかぜ」がある。